蝙蝠模様に対する江戸期の人々の価値観

稲熊ふう

一、はじめに

江戸時代の小袖のデザインは主に前期、中期、後期に分けられ、その特徴が異なっているが、ここでは近世文化研究会が『図説　浮世絵に見る色と模様』[1]で示した時代区分を参考にどのような特徴があるのか、またどの時期に蝙蝠模様が登場したのかを見ていく。

【前期】寛永～宝暦末（一六二四～一七六三年頃）

＊主な模様の特徴…寛文模様（花・鳥・器物などを、背中の上部に重点を置き、左あるいは右の肩から裾に書けて描き、反対側に空白を残したデザインのもの）・元禄模様（寛文模様を踏まえたもので、友禅染めによって描かれる）

【中期】明和初期～寛政末（一七六四年頃～一八〇〇年頃）

＊主な模様の特徴…縞模様・格子模様（地味で落ち着きのある「底至り」の美意識の出現）

【後期】享和初期～幕末（一八〇一年頃～一八六七年頃）

＊主な模様の特徴…色調及び柄模様は中期の延長だが、歌舞伎衣装から取り入れられた三筋格子・蝙蝠模様・観世水等が歌舞伎役者や町芸者により世間に流行した。

時代が移るにつれて様々な模様が産出されていったことがわかるが、現代でも聞き覚えのあるものは、時代劇等でも使用されている煌びやかな元禄模様や、最近注目を浴びているアンティーク着物で馴染みの深い縞模様や格子模様といったところである。しかし江戸後期に流行したといわれる「蝙蝠模様」といえば今では馴染みがあるどころか気味悪くさえ感じられるだろう。『動物のシンボル事典』には次のように書かれている。「こうもりはずっと空中を飛び、昼を厭い夜の闇を好み、暗闇の中でも目が見え移動することができて、そのうえ頭を下にして眠る哺乳動物であり続けた。これだけそろえばどうしても悪魔好みの夜の鳥ということになるだろう」[2]。こういった誰もが不気味な印象を持つ蝙蝠が、江戸時代にはなぜデザイン化され、好んで使用されていたのだろうか。そんな疑問から、江戸時代の人々が抱いていた蝙蝠像というものを明確にした上で、蝙蝠模様に託された意義を解明していくことにする。

二、蝙蝠模様の吉祥性

蝙蝠が模様として表現されたのはもともと中国が起源とされている。「蝙蝠」は中国語で「biān fú」と発音し、「幸福」の「福（fú）」と同じ発音であることから吉祥のものとして受け入れられていたのである。それは、「中国の文様には語音が通じる事物を関連させて吉祥とし、さらにいくつかを組みあわせて成句を作るという遊戯的な一面がある」[3]と説明されている。「吉祥」はまた、中国では次のような意味も含まれている。

はじめ神々に除魔招福をいのることにはじまり、現世の利益、具体的には、すぐれた子孫に恵まれ、家門は栄え、安

楽の境地で一生を過ごすこと（福）、順に大利を獲ること（禄）、天命が尽きることなく、老いることなく、いつまでもみずみずしい活力が持続されること（寿）を願う[4]

さらに、蝙蝠と鹿と万年茸を組み合わせた図は長寿の象徴として福禄寿の意味を持つと言われている[5]。

日本文化の中には中国から輸入されたものが数多く見られるが、蝙蝠模様もその例外ではなかった。吉祥模様としてそのまま取り入れられ、衣服のデザインとしても様々な意匠を凝らした蝙蝠模様が作り出されていった（図1・2・3）。衣服の他にも吉祥模様の傾向がもっとも強く表われているデザイン画が図4であろう。この絵は『当時流行蝙助』と題され、扇子の部分を除いては全てが蝙蝠で形成されている福助の絵である。これは戯作者で噺家であった桜川慈悲成が天保元年（一八三〇）に自費出版し配ったものとされている。また、江戸の年中行事の一つであった初午祭りで蝙蝠模様を着た女性を描いた浮世絵も残されている（図5）。これは「かまわぬ」という役者模様に蝙蝠柄を合わせた模様であり、その配し方に優れたセンスが感じられる。この「かまわぬ」と蝙蝠模様の組み合わせは一見ただの柄合わせ模様に過ぎないが、両者には深い関係性がある。

まず、「かまわぬ」とは当時流行した「役者模様」の一つであるが、「役者模様」については以下のように考えられている。

歌舞伎役者も、自分の個性をアピールするために、衣裳に自分専用の色と柄を考案するとともに、出し物や役柄に合わせて新しい衣裳を毎回披露しました。町方女性たちは、贔屓の役者が用いた色や文様を自分たちの「きもの」に取り入れただけでなく、とくに女形の衣裳からは、そのままこれを最近ファッションとして受け入れ、小袖や帯、さらには帽子（頭巾）にまで、早速これらをまねしました[6]。

役者模様が多くの人に親しまれ、歌舞伎に夢中になっていた頃の様子を窺い知るものとして文化一三年に書かれた武陽

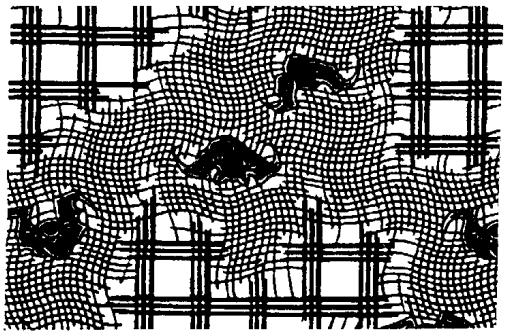

図2　動物模様型紙
第2アートセンター『日本の文様18動物』小学館1989年3月1日

図1　紋付蝙蝠と瓢箪文様
片野孝志『江戸文様事典』河出書房新社1987年6月30日

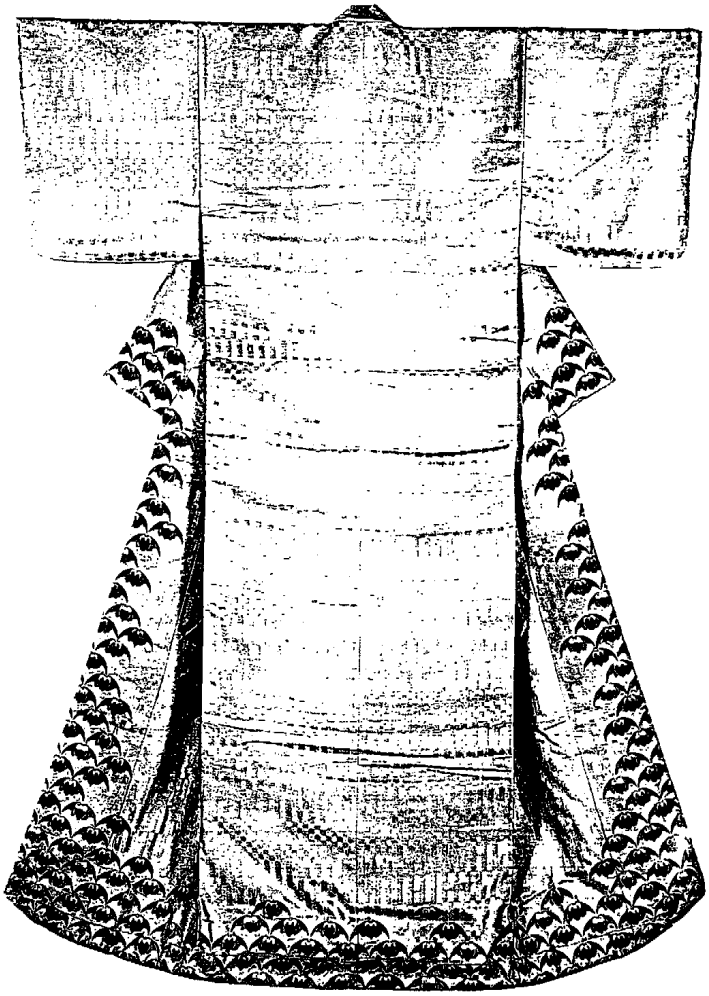

図3　金茶地蝙蝠模様友禅染小袖
第2アートセンター『日本の文様18動物』小学館1989年3月1日

図4　当時流行蝙助桜川慈悲成
稲垣進一『江戸の遊び絵』東京書籍 1988年7月8日

陰士の『世事見聞録』はまさに好個の資料である。

全体この歌舞伎役者なるものは、武家はさほどにもなきが、町人・遊民等は殊のほか好み、別して婦人・女子の執心深く懇望するものにて、ことごとくかの愛敬にいりたるものなり。その婦人・女子の懇望に引かれて、男子も同じく贔屓するなり。（中略）舞台衣装の染め方が世の中の流行模様となり、路考茶・梅考茶・三升形・福牡丹・大和屋格子などと世に広く行はれ、役者の言葉曲が世の通言となり、すべて婦人・女子の賞翫する事も、雑談にも、女子嫌ふ男と芝居嫌ふ女はなきといふ如く、一度芝居を見たる女は三度の食事に替へても懇望いたし、殊に年若の女などは、芝居に行けば親の事も夫の事も忘

図5　王子稲荷初午祭ノ図　三代豊国
西山松之助　宮田登『江戸時代図誌第六巻江戸三』筑摩書房 1977年11月18日

れ果て浮かれ立ち、髪の風、形姿の拵へ方もこれに真似て、常に心の本とするなり。(7)

町人の中でも特に女性たちが歌舞伎という非日常的な世界に心を奪われていた様子が鮮明に記録されている。常に話題の中心であった歌舞伎役者の衣装柄が流行を生み出したというのも必然的なことであろう。「かまわぬ」模様も例外ではなく、七代目市川団十郎が舞台で着用したことから急速に広まった役者模様であった。図6は『細工物籃轎評判』を上演したときに浪花の次郎作の役で使用された衣装である。羽織に鎌の絵と輪と「ぬ」の文字がはっきりと見て取れる。この「かまわぬ」模様はもともと明暦（一六五五～五六）から元禄（一六八八～一七〇四）頃まで町奴の間で、弱い者を助けるためなら水火も嫌わない、自分の命を犠牲にしても構わない、という心意気を表わすものとして一時好んで用いられていた模様(8)・(9)であった。時の流れと共に廃れていったが、役者模様として再び注目されることとなっていったのである。

図6　細工物籃轎評判（さいくものかごのうわさ）　歌川国安

近世文化研究会『図説浮世絵に見る色と模様』河出書房新社 1995年7月25日

さて、この役者模様「かまわぬ」と蝙蝠柄の関連性であるが、「かまわぬ」模様の火付け役、七代目団十郎の替紋が蝙蝠紋であったことに由来している。『新燕石十種　第七巻』の中の「寝ぬ夜のすさび　巻之三」ではそれを、

又三すじ格子の縞をつける、此縞を地につけて、それに蝙蝠の飛るかたちをゑがくが多し、是は市川団十郎が紋より出でたるなり、かれが紋に一輪牡丹を用ふ、是を福牡丹といふ、（中略）この福牡丹の福の字を蝙にとりな

して、蝙蝠を紋につけしより、かく流行いたせしなり、[10]

と述べている。ここでもやはり中国の趣向同様、吉祥的意味を重んじ登用していたようだ。七代目団十郎によって二種類の模様が流行したことで、図5の絵では話題の模様を組み合わせ、春祭りとも呼ばれた初午祭りでお披露目をしているのであろう。現代の概念でこの衣服を見れば、なぜ祭りというにぎやかな場所でわざわざ蝙蝠と鎌という不吉な模様を着るのだろうかと疑問に思われるが、実は最先端のデザインであり、しかも「蝠」という縁起を担いでいることが本義なのである。

図7　今様弁天尽本所一ツ目外
歌川広重
近世文化研究会『図説浮世絵に見る色と模様』河出書房新社1995年7月25日

三、蝙蝠模様の流行と花柳界

中国文化に基づいた吉祥柄に重点をおいて蝙蝠模様を考察してきたが、ここで図7を見ていただきたい。この絵には「芸者の座敷着の裾模様は江戸っ子の意気を示す様式として多用されたもので、裾模様の意匠はその時代の流行を自由に取り入れている」[11]とコメントされている。当時流行していたデザインのものをいち早く捕らえる芸者が蝙蝠模様の小袖を着て、裾をたくし上げ素足が見える状態で立っているものである。夜の仕事を営む芸者にとって着飾ることは当然として、その時の流行に乗ることで逆に人気の模様柄を広めていく役割を果たしていたのである。「流行風俗の最前線を行き、つね

に新しい風俗を考案しリードしていたのが歌舞伎と遊里であった。人気のある歌舞伎役者と全盛の遊女が、その実質的な担い手だった。[12]」とあるように彼女たちが流行色をより強めていったのである。

また、蝙蝠模様であることに注目するならば、蝙蝠と言う動物は獣であるのに鳥のように空を自由に飛び回ることができることから「鳥であって獣でもある」、「鳥でもなければ獣でもない」と、どっち付かずの象徴であり、それが多くの客を相手とする遊女を連想させる。蝙蝠も遊女も昼間は静かに身を潜め、夜になると活発に行動をする習慣が同じであることから、ただ単に蝙蝠模様流行の発信者として浮世絵に描かれたのではなく、より夜のイメージを印象付けるものとして、妖艶さや色っぽさを強調させるために表現されたものではないか。図8では、「蝙蝠模様の型染めにビロードの襟かけの小袖はいかにも夜に生きる粋筋の女を象徴している[13]」と説明されているように、吉祥模様という意味だけに囚われず、蝙蝠が本来持つ習性を見極め、遊女に宛がうことで新たな魅力が引き出されていった。図9は男性的な龍の模様の打掛と蝙蝠柄の帯を合わせて着用することで、当時のファッションスタイルの一つである「伝法」の要素も加えられたものとなっている。文献上では蝙蝠模様を取り扱っているものは極めて少ないが、このようにして浮世絵から蝙蝠模様の描写を直接見ることができるのである。

図8　今様美人拾二景しんきそう　渓斎英泉
橋本澄子　高橋雅夫『浮世絵に見る江戸の暮らし』河出書房1988年7月30日

図9　雲竜打掛　溪斎英泉
赤井達郎『〔日本の美と文化〕第15巻浮世絵と町人』講談社
1982年5月31日

四、おわりに

以上のように蝙蝠模様は吉祥的意義のみならず、中国では見られない遊女との関連性を持った日本独自の特性が加味されたものとなった。今となっては蝙蝠は西洋文化に因んで忌み嫌われる存在となってしまったが、当時の人々もめでたい模様として認識しなければ有名役者の替紋にも起用されず、遊女との接点もないまま意匠としては程遠いものとなっていただろう。それがたまたま流行模様となり様々な柄合いのものが考案され、現代でも目を引くような斬新なデザインが数多く残されているのである。日本に存在する多種多様な模様柄の中で蝙蝠模様ほど多くの意味を含み、異なった視点でみることのできる模様は他にはないであろう。ここに江戸期の人々の柔軟性と、洞察力を活かした創造性を感じ取ることができるのである。

付記

小論は、平成一五年度二松学舎大学へ提出した卒業論文、『近世のデザインから見る人々の生活と心』の第一章第四節「蝙蝠模様について」を再考察し、改めて論述し直したものである。

〔注〕

(1) 近世文化研究会『図説　浮世絵に見る色と模様』(河出書房新社　一九九五年七月二五日)八頁、三〇頁、七〇頁。

(2) ジャン＝ポール・クレベール　竹内信夫　訳『動物シンボル事典』(大修寛館書房　一九八九年一〇月二五日)一五〇頁。

(3) 中野徹・小川忠博『展開写真による中国の文様』(平凡社　一九八五年八月二三日)頁不掲載。

(4) (3)に同じ。

(5) 「鹿に蝙蝠の図は、鹿が禄に訓みが通じ、また蝙蝠の蝠は福に通ずるところから、福禄となる。さらにこれに万年茸ともよばれる霊芝を加えることによって、長寿の象徴として、福禄寿を意味する。」二見康生　第二アートセンター編集『日本の文様一八動物』(小学館　一九八九年三月一日)一七六頁。

(6) 長崎巌『「きもの」と文様――日本の形と色』(講談社　一九九九年一〇月二五日)二一一頁、二一二頁。

(7) 武陽陰士　本庄栄治郎・奈良本辰也　校訂『世事見聞録』(岩波文庫　一九九四年一二月一六日)三四六頁、三四七頁。

(8) 「明暦(一六五五～五八)から元禄(一六八八～一七〇四)の頃まで、江戸の町奴の間で流行した。後に文化年間、七代目市川団十郎(一七九一～一八五九)が様式化して舞台で着用したところから一時流行したという。」尚学図書編集『文様の手帖』(小学館　一九八七年一二月十日)一五五頁。

(9) 「江戸時代初期に町奴の間で流行、『水火も辞せず(私の命はどうなっても構わぬ)』の意を寓したもの」注(1)に同じ。八八頁。

(10) 森銑三・野間光辰・朝倉治彦　監修『新燕石十種　第七巻』(中央公論社　一九八二年二月二〇日)二六一頁。

(11) (1)に同じ。一〇〇頁。

(12) 服部幸雄『江戸歌舞伎の美意識』(平凡社　一九九六年三月一三日)三四頁。
(13) 橋本澄子・高橋雅夫『浮世絵に見る江戸の暮らし』(河出書房新社　一九八八年七月三〇日)一二四頁。